

学習指針としてのシラバスと初回授業

— 基礎ゼミナールの実践例 —

大学教育センター・准教授
林 祐司

研修としての基礎ゼミ

本稿では筆者が担当している基礎ゼミ「働くことを考える」において、筆者が学生たちに学習指針を与えるために、シラバスと初回授業をどのように活用しているのかを記す。基礎ゼミのシラバスによれば、本学の学士課程教育において基礎ゼミはつぎのような事柄が目的とされている。

1. 受動的学習姿勢から能動的学習姿勢への転換
2. 課題解決に必要な技法の体験的習得
3. 豊かな人間関係の形成

筆者が専門とする労働問題・人的資源管理の分野では人間の能力は知識・スキル・行動特性 (Knowledge, Skills, Attitudes, 略して KSAs) の3つに分けて考察されることがある。基礎ゼミで目標とされている3つの事柄をこの分類に照らすと、基礎ゼミは知識の伝授よりむしろ、スキルや行動特性に括られるものを養うことが求められていると考えられる。そう考えると基礎ゼミは、一連の体系立てられた、教養の香りただよう知識を学生に教授する「教育」よりは、「研修」や「訓練」といったある種の泥臭さが伴うものに近く、そうしたことを念頭に、授業を設計するのがひとつの正解であると言えるのではないだろうか。

では、研修や訓練なるものは一体いかなる時に有効なアウトカムを生むとされているのか。研修が良好なアウトカムを生むのは、1) 研修の目標、目的や期待される効果が受講者に理解されているとき、2) 研修で教わる内容と研修後の仕事等で実践する内容とのあいだに関連があり、そのことが受講者に納得されているとき、3) 他の受講者がどのように参加しているのかを観察できるとき、4) 受講者に練習の機会が与えられ、受講者がその機会を積極的に利用するとき、5) 他の受講者から、

自分のパフォーマンスについてフィードバックが得られるときであると整理されている (Noe and Colquitt, 2002)。筆者はこれらの条件を満たすために、次の通りシラバスと初回授業をつくっている。

シラバスでの対応

本学のシラバスはいくつかの項目から構成されているが、筆者は「修得できる知識・能力や授業の目的・到達目標」の項目に「聞く・読む、調べる・整理する、発表する・表現するなど、大学における能動的学修の基本となるスキルを身につけることを目的とする」と記し、筆者の基礎ゼミのプログラム全体の目標について記している。また、「授業計画・内容」の項目に各回の授業内容を記すことで (例、2回目、ノート・テイキングの技術、文献の読み方)、プログラムを構成する各回の目的を示しつつ、基礎ゼミの内容とその後の学習との関連が伝わるように配慮しているつもりである。これらは条件1と条件2への対応である。

しかしながら、本学のシラバスの分量は多くとも A4 用紙1枚にすぎない。それゆえ、筆者が授業を始めるにあたり学生に伝えておきたいことをシラバスにすべて詳細に記載することはむづかしい。FD アンケートの結果を見るかぎり、本学の学生はシラバスを活用しているとも、いないともいえない状況にあることがしばしば本学では話題になっているが、そもそもシラバスの分量が少ないのであるから、学生は履修登録をする際の科目選択のカタログとしてシラバスを活用したのち、あえてシラバスを開いてみようと思わないのではないだろうか。電子化されるなどしてシラバスの分量が増加し、教員としていろいろと伝えたいことをきちんと書き込めるようになることで、本学のシラバスが学生にとって頻繁に参照する価値のあるものになればよいように思われる。

いずれにしても、現状では分量が不足しているがゆえ

に、シラバスの記載内容はどうしても精選せざるをえず、授業を開始する前に筆者が学生に伝えておきたいことを伝えることはできない。そこで筆者は、初回授業ではシラバスを片手にそこに記したことを学生と確認しながら、これからどのように授業を行い、学生に取り組んでもらいたいのかを語ることにしている。

初回授業での対応

既述のとおり筆者の基礎ゼミでは、聞く・読む、調べる・整理する、発表する・表現するといった基礎的な学習スキルを学生に身につけさせることを目的としている。学生たちには授業の最後で筆者の専攻である労働問題に関連しておのおのが関心を持っていることについて発表させている。発表に至るまでのあいだ学生には通常の研究に同じく、文献を探索し、読み、まとめ、考察し、発表資料を作るというプロセスを体験させている。

本学の学士課程教育における基礎ゼミの目的がスキルや行動特性の開発にあることに照らせば、筆者の基礎ゼミにおける労働問題という対象はあくまでもそのための手段にすぎない。このことはシラバスにも示してあるし、また初回授業で話してもいる。しかしながら、スキルや行動特性の開発は、それらに関する話を聞くことのみではなされにくく、何らかの具体的なプロジェクト—この場合であれば労働問題を題材にプレゼンテーションを行うまでのプロセス—に試行錯誤しながら主体的・積極的に携わることによってなされるものであると筆者は考えている。筆者の能力開発に関するこうした考え方についてまずは学生たちに説明を行ったうえで、各回の授業においてどのような事柄を取り扱い、そしてそれが実際の大学生活における学習とどのように関連するのかということについて、シラバスに記したことをさらに深めるかたちで明らかにしている。ここまではシラバスで行った条件1と条件2への対応を深める作業であると捉えている。

こうした説得を前提として他の参加者の観察(条件3)、練習機会の積極的利用(条件4)、他の参加者からのフィードバック(条件5)を満たすために、初回授業では学生たちを班別に分け、成績の付け方を説明している。班分けは、学生が自分の作業の進捗状況を他の学生と比較し、自分の達成状況を折に触れて把握できるようにさせ

るためのものである(条件3)。

価値のある資源を配分する方針を示すことは、他者にとらせたい行動をとらせるために有益な手段である。学校ではそのようなものとして成績評価を位置づけることができよう。筆者は学生を基礎ゼミにコミットさせ、作業に積極的に参加することを奨励するために、成績評価は出席回数にもとづく得点を基礎としているが、最終的な成績評価は、個人の成果物のできばえとグループでの議論の結果報告に応じて、出席状況にもとづく基礎点に加点・減点を施すことで算出している。具体的には、できばえの評価は、論文の要約、論文のレジュメ化、最終報告に関連する文献検索の結果、最終報告の4つの課題について、授業で説明したことができているかという観点から評価している。またグループでの議論は、課題を制作している過程で学生たちに班別に中間制作物について議論させ、その議論から得られた改善点を報告させ、グループ点としている。こうした成績の付け方について初回授業で学生に平明に開示し、個人での練習の機会を積極的に利用するインセンティブと他者の作業にコメントを加えるインセンティブを与え、学習のための指針を与えている(条件4・5)。

まとめ

上記したとおり、筆者は基礎ゼミをスキルや行動特性を開発する研修の一種であるにとらえ、授業を設計している。研修を有効なものとするための条件を5つあげたが(Noe and Colquitt, 2002)、シラバスにおいてそれらのうち条件1・2に対応し、初回授業では条件1・2を深めながら、条件3・4・5への対応を行い、学生たちに学習指針を与えるようにつとめている。

引用文献

Noe, R. A. and Colquitt, J. A. (2002) "Planning for Training Impact: Principles of Training Effectiveness", in Kraiger, K. (Ed.) *Creating, Implementing, and Managing Effective Training and Development: State-of-the-Art Lessons for Practice*, San Francisco: Jossey-Bass.